

新メンバー加え 学生広報が始動

新潟県大（新潟県立）は先月、学生広報で大学の魅力をSNSで発信する「学生広報チーム」の任命式を行った。2024年度の男女各一人が早速ミーティングを開き、活動のスタートを切った。

学生広報チームは2020年9月に5人で発足し、6期目。4年生の2人以外は新しく加入した。任命式で、学生広報は「皆さんが主体的に情報を発信していくことが、大学の活動の活性化につながる」と述べ、大学の大使と



として、語り継いで活動してほしいと期待を込め、一人ずつに任命状を手渡した。式後、7人は今後の活動方針を決め、新メンバーの4人は一週間のカメラの使い方を教わった。

1年ぶりに広報チームに復帰した4年・本田翔太さんは「SNSの活用は、大学の魅力を発信する上で、とても大切な役割を担っている」と語り、SNSが命だと実感した。

任命式を終えて早速、活動方針や計画を話し合う学生広報チームII新編版大会開催

●●●産大レクチャ―
●●●ア・ラ・カルト

東京で生まれ育ち、私が産大に赴任して26回目の正月を迎えました。母校の助手を経て34歳から35歳に今年年の暮はしたので、定年まで残すところあと1年を切ったことになるわ。

そこで今回は、一大学教員として柏崎の皆さんとの交流の場となった公開講座について書かせていただきます。

柏崎への感謝の気持ちを込めて。

手紙の記録とすると

その間このコラムには5篇論文を掲載していたが、本学教員の執筆願がらいつて、これがおそらく私の最後の寄稿となるでしょう。

な上、愛知県立大学の
公開講座は03年に始ま
り、以降、毎年春と秋半
期にわたっています。

図書館の扉には、お
もひの館、なかでも後援
時代の築山園主であるS

刈羽村上郷（テーマ
ルズ）・妙高市など
でも開催され、以来、県
内での公開講座は現在ま
で総計10回に及び、
柏崎市内に關しても1
回来賓するものになり

柏崎
 ありがとう、
 柏崎
 ました。
 かくも多くの愛護者に
 恵まれ、私ほつとて幸
 せ甚だと思ひます。
 私の講座、とくに仏教
 美術の講座では、時間
 の關係後、受講者の質問

が多くを占めますが、17
 年には厚障がひ高く、相續
 文化館を閉じなどもあ
 ります。
 そんなした講座は、村上
 市・新潟市・五老市・湯
 沢町・魚沼市・長岡市・

ありがとう、柏崎

を紙に書いてもらい、翌週お客先をブリックとして配付するという形式が定着しましたね、それにより私自身の進歩が促されることにもなりました。

話をする際には十分な予習が必要なのに加えて、質問用紙には研究者の発想にはない柔軟かつ重要な問いかけが含まれており、そのことがまた学生との日々の授業にも活か

片岡直樹

“महाराज, आपका नाम क्या है?”

市民大学では数年にわたり講座の企画に携わる委員も務めさせていたが、会議では市民の方々と市の職員の間さんから相違についていろいろなことを教わりました。

公館跡の屋中の与太郎で「虎ノ門の老舗の和菓子店の大層が絶品だ」と品したところ、かつて柏崎にものれん分け店があったことを調べてきてくださった方がいらっしゃいました。

の「水族館」があつたが、大波で魚がみんなさらわれてしまったと聞かされて大笑いしたことなども楽しい思い出です。

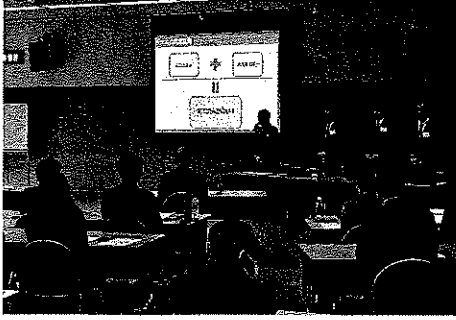
「そいつで結婚は、各々
ふつど、私の第三のふる
ちやにならうものだ。」

市民大学では今年も6月から7月に「會津八一が歌んだ御仏たち」と題して4回の講義を行います。

残る柏崎での日々を皆
さんとともに過ごさせて
いただければ幸いです。

（接上）
——第一回——

県立柏崎高等学校で、リーダー塾第6期生の課題研究の計画発表が行われた。写真：県立柏崎高等学校提供



リーダー塾第6期生 課題研究の計画発表 3チーム13人熱心に

交流人口、若者流出 人材不足などテーマ

県立柏崎高等学校で、リーダー塾第6期生の課題研究の計画発表が行われた。写真：県立柏崎高等学校提供

県立柏崎高等学校で、リーダー塾第6期生の課題研究の計画発表が行われた。写真：県立柏崎高等学校提供

写真：県立柏崎高等学校提供

「新緑の森」 地域に学ぶ 地域を学ぶ

——定例活動レポート——

ゼミ活動を 振り返って

新潟県立大学定例ゼミは、2014年の10月都市ビジュアルコンテストで入賞したことをきっかけに、「縄文クッキーおうちん」「良寛と貞心尼の歌物語」というクッキーセットを株式会社アルボン、和菓子店最上屋の支援を得て企画・開発した。

これらが火焼堀主郷、良寛と貞心尼の歌物語、地域の観光資源のPR活動へと発展し、2016年度から2年間、私が柏崎市の大学・地域連携推進事業委託し、学生たちとの活動を続けた。

さらに、私が県柏崎地域振興局より良寛と貞心尼をテーマとした広域観光開発業務の委託を受け、良寛と貞心尼の歌物語「モノニタニ」を実施した。

17年度に市内堀町内会から当地区の耕作放棄地の活用を依頼を受け、野菜栽培を始めた。翌年度から新潟県柏崎地区で柿の木を植える活動になった。これまで5年間にわたり、野菜と柿栽培を通

じ、学生たちが地域の農業を体験することができた。そして野菜と柿栽培を通じて得た体験について「柏崎に関する研究発表会」「新潟県地域活動・学生発表交流会」で発表を行った。

堀地区で野菜栽培をしたことがきっかけとなり、耕作放棄地の問題に関心を持つようになった。23年の秋から高柳町岡田地区の耕作放棄地に植林する活動を始め、最初は秋にケルマ・ドングリなどの木の葉を試みに播き、まいたが、うまくいかなかった。

24年度から松・杉・栗・タラの苗を移植し、畑の枝を挿し木にした。これまで5年間にかけて数百本の木を植え、おちおち育ちてきた。しかし、耕作放棄地

を始めた。

今後は石巻根の安住孝の森山にフナ、ねむの木などを植林する活動を計画している。

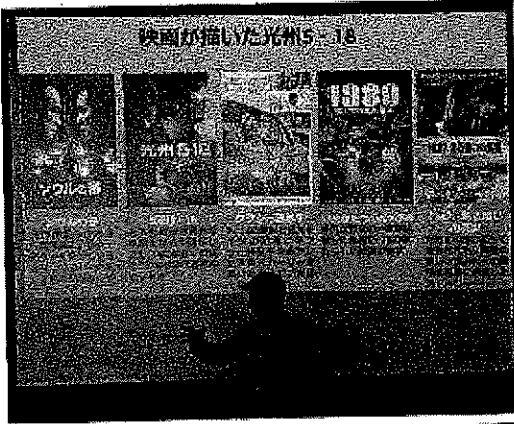
経済学部教授・金光林（同大学地域連携センタ



「過去が現在助ける」

東新大 韓国の歩み講演
柳教授

新潟県大で、韓国・東新大の柳在福（ユ・ジンボク）教授（67）による講演「体験から語る韓国現代史」が開かれた。1960～80年代の激動期を自身の経験を通じて語った。



柳氏は全南大を卒業後、関西大学、西天大、京大、日本文学を専攻し、現在は光州市を拠点に研究・教育活動を行っている。講演は12日、特別授業の後に一般公開され、市民ら約20人が聴講した。

柳氏は、韓国が60年代に32万人以上をベトナム戦争に徴兵し、多くの戦死者や枯れ葉剤の被害者を出した事実を紹介。「戦争は市民生活に深刻な影響を与えたと指摘した。また68年の北朝鮮による「1・21事態」を契機に、社会が統制された過程を説明。郷土平僱軍の創設や住民登録制度、制度、学校での軍事訓練、夜間外出禁止、文化・言論の自由など、国家統制が強化されたと述べた。

80年の光州民衆抗争は大きな転機だったという。抗争は軍により武力鎮圧されたが、87年の「6月抗争」につながり、憲法の大統領直接選挙制が実現した。最後に、ノーベル文学賞を昨年受賞した韓国の作家・韓民圭のきつかけとなった光州民衆抗争をテーマにした韓国映画を紹介する柳在福氏。新潟県大

江（ハン・ガン）さんの言葉「過去が現在を助ける」とはできるのか。死者を生かすことはできるのか」を引用。「それに対し、韓国国民は『当たり前』と答えた」とし、「歴史は繰り返すが、せんのうちに、時には後進しながらも前進していかなくてはならない」と述べた。

聴講した市内栄町の柳見亮（ミョウ）さんは「興味深い話だった。20代の頃、親友のあつた韓学生から『朝鮮は悲しみの民族』と聞いた。言葉が今も心に残っている。韓国旅行では見えなかった地域の暮らしや歴史を改めて考えさせられた」と語った。

産大レクチャー ●●● ア・ラ・カルト 〈209〉

水球の日本最大級のイベント「ア・ラ・カルト」は、2010年以降、毎年5月、東京五輪、パリ五輪と大会連綿で、延べ11人の男女オリンピック選手を輩出している。私は、17年度から廣川俊秀先生と青柳勲先生の2人の後任として大学に赴任し、同年度からクラブの強化を担当してきた。昨年から8年が経過し、選手たちも関係者た

ちと言葉を共にしてきた立場として、クラブのこれまでと今後について記そうと思う。

2010年の設立時に立てたクラブの目標は①多くのオリンピック選手を輩出の他、②日本選手権大会での優勝③全国、世界の競技交流の小学生を中心とした水球に抱ける機会を増やすの目標で、健全な青少年の育成④市民に広げていただけを地元密着型のチームを目指

指すことであつた。②から④について、目標に対してのそれぞれの成果をまとめてみる。①は冒頭記載。

②の日本選手権優勝については、12年と18年の

水球を、人々の日常に

佐々木洋輔

射を回進している。日本一を何度も経験してはいるが、この経験が上ばていくべく、励んでいる。

③の競技交流については極めて盛んと言え、北信越同窓会が中心

場チームの集まる新潟レイズスカフには24年度は14チームの大会参加、国際的な大会であるアジアパシフィックリーグに24年度はチームの大会参加があつた。

的出ている。小中学校出前水球授業の依頼は毎年14校前後となっている。水球の体験活動の機会

④の青少年の育成については、水球に限らず日々の活動や学校生活、家庭生活全般が寄与するため直接的な評価が難しい。一方で、「青少年の育成」という項目は指導者会議等で頻繁

に話題に上がり、目標にコミットできているかの振り返りが行われていた。

⑤の地元密着型については、関東地区の社会人チームと比べると、アールボーンウォーターポロクラブは、地域に出ている、年間10個程度の地域イベントに参加している。

おおむね全ての項目で目標達成がなされているが、クラブに深くかわる人たちの中では、より良いクラブ作りを目指して、目標の見直しをかける必要性が議論されて

きた。25年度においては、ドジョーンと新ミッシェンに明確にするのを進め、24年度から新ミッシェン・新ミッシェンを掲げて活動を開始させている。新ミッシェンは「柏崎から熱狂を、柏崎の可能性を。」、新ミッシェンは「水球を、人々の日常に。」である。クラブの第一歩が終わり、新ミッシェンと新ミッシェン共にクラブの第一歩がスタートした。これからの楽しみである。

（経済学部講師）

11 毎月1回掲載